



さくら(SAKURA)

佐倉市のストリートオルガン

DRAAIORGELS in SAKURA



ストリートオルガン

ヨーロッパの国々の中で、オランダでは町の通りで必ずと言って言い程ストリートオルガン(街頭手回しオルガン)を見かけます。華やかな絵が描かれたパネルや鐘をたたく人形は見た目にも楽しく、パイプ(笛)を中心に大太鼓、小太鼓。中にはアコーディオンやサクソフォン、木琴、木魚などの楽器も取付けたものもあり、その演奏には、しばし足を止められてしまいます。オランダの町の風景にはなくてはならないものの一つでしょう。

ストリートオルガンは、1880年頃フランスで開発され、ヨーロッパ各国で使われていました。1920年頃までが全盛で相当の数がありましたが、大道音楽家の手に渡ると、乱雑な扱いのためにオルガンは痛み、次第に数が減ってしまいました。何故、未だにストリートオルガンがオランダで良く見かけられるのでしょうか。それは、アムステルダムのペルシー家が、古いストリートオルガンを修復。また新しく製作したり、楽譜の製作に努力したからだと言われていいます。だが次第に、演奏を職業とする人も減り、今ではオランダでもストリートオルガンは、約200台程度しかありません。楽器の製作者も数人しかなくなりました。しかし、オランダの人々は、ノスタルジックな音色のこの楽器に愛着を持ち続けています。

ユトレヒト市にあるオランダ国立自動楽器博物館をはじめ、数箇所で開催、活用しています。アッセン市のストリートオルガン博物館には10台以上が展示され、ストリートオルガンに囲まれ、ビールなどを飲みながら楽しく演奏を聞くことが出来ます。アッセン市ではストリートオルガン祭があり、この時には、博物館のストリートオルガンのパレード演奏もあり迫力満点です。

ストリートオルガンは、自動演奏楽器であり、教会やダンスホールに置かれた自動パイプオルガンの仲間です。移動を可能とし、街頭で演奏したためにストリート(通り)のオルガンと呼ばれるようになりました。開発当初は、現在のオルゴールのシリンダーの大きなものを回して演奏する構造でしたが、1900年頃、今日見られるような厚紙に穴をあけたブック(楽譜)を、空気の利用して演奏する構造となりました。レジスター装置もつき、あらゆる音楽の演奏が可能となり、音色も豊かになりました。

演奏は、オルガンの後側に鋳物の輪(ハンドルのようなもの)を付け、これを手で回すことにより、「ふいご」で空気をため、同時に折りたたみ式のブックを移動させます。曲に従って穴のあけられているブックは、各パイプなどの楽器につながるキー(オルガンの鍵盤に相当するもの)を作動させ、「ふいご」からの空気を送り演奏します。鋳物の輪を回すことは大きなストリートオルガンになると大変な労力があるため、最近ではモーターを利用しているストリートオルガンも多く見かけます。

電気などによる無機質な音色が多くなった今日、何か温か味を感じさせるストリートオルガンの音色は、絶えることなく流れ続けて欲しいものです。

● 佐倉市民音楽ホールのストリートオルガンの演奏が
2枚のCDになりました。

「ザ・ストリートオルガン」(ベニンゲン・さくら) COCC6436

「ザ・ストリートオルガン」(サーター) COCC6437

〈発売元〉 日本コロムビア株式会社

「さくら」SAKURA

(1988年製)

佐倉市に初めて登場した特別注文のストリートオルガン。台車に乗っており、ひと目でストリートオルガンとわかります。重量は300kg。パネルの幅2m40cm、高さ1m70cmの中型で、キー（オルガンの鍵盤に相当する部分）は、メロディー部22、伴奏部11、ベース部8、打楽器部3、レジスター部3の合計47。これにつながるヴァイオリン、フルート、ベースなどの音色を出すパイプの数は127本あります。他にドラム、スネアドラム、シンバル、鐘、人形が2個付いています。

「さくら」の音は明るいほうですが、オランダのストリートオルガンに共通する落ち着いた音質を持っています。パネルは、佐倉市の市章、佐倉市の木「桜」、佐倉市民音楽ホールにあるブロンズ像「天使の像」の絵とオランダの象徴チューリップと風車が描かれています。

ストリートオルガンは、ほとんどが手づくりです。質の良いパイプを何本も制作することは時間のかかることで、全体が完成するのは最低1年もかかります。「さくら」は注文から6か月で佐倉に届きました。これは、オランダ大使館の格別のご協力と製作者ヘンク・ヴェーニンゲンの並々ならぬ努力のおかげです。

【購入協力】 伊東部品株式会社、オランダ家、
日本貨物航空株式会社



▲演奏中のヴェーニンゲン



▲親日家のハスベルス館長

▶オランダ・マッカムの街頭で





ヴェーニンゲン(VEENINGEN)

1989年製

パネルの幅1m20cm、高さ1m。
パネルには、運河のそばの風車と
赤いバラの絵が描かれている可
愛らしい小型のストリートオル
ガンです。キーは35で、メロデ
ィー部19、伴奏部12、低域部4。
ヴァイオリン、フルート、ベー
スを奏するパイプは47本です。
「ヴェーニンゲン」は、音質が優
れており、全体のバランスがと
れたパイプオルガンの原点を感
じさせる優れた楽器です。

製作者ヴェーニンゲンの愛蔵
品でしたが、友好を深めた佐倉
のためにと特に譲ってくれまし
た。彼の好意にこたえ、彼の名
前を楽器につけました。日蘭修
好 380 周年を記念して千葉銀行
からの寄贈品です。

●ストリートオルガン製作者

ヘンク・ヴェーニンゲン (Henk Veeningen)

現在オランダでストリートオルガンを製作・修理している人は3人か4人しかいません。その一人ヘンク・ヴェーニンゲンが「さくら」と「ヴェーニンゲン」を製作しました。

アムステルダム中央駅から北の町フローニンゲン行きの特急電車で1時間半、ドレンテ州のメッペルに着きます。ここから車で運河沿いの柳並木を走って15分。ヘンク・ヴェーニンゲンの住むデ・ヴァイクの町です。牧草地の中にある小じんまりとして落ち着いた住み心地の良さそうな町です。役場の前には大きな風車があり、そこから徒歩5分ぐらいの所に彼の住居と製作所があります。40代の彼は仕事熱心で、勤勉と言われている日本人以上の働きぶりです。オランダにあるストリートオルガンの修理と日本向けの新

製品の製作に追われているのです。向こう8年間はこれで手一杯だそうです。

彼は、起床すると二人のこどもとプールに行き、その後、家族全員で朝食です。こどもは、それから学校です。もと学校の教師だった奥さんは、時おり学校にボランティアで指導に出かけています。奥さんもこどもも、時間があるとストリートオルガンの製作の手つだいをしているようで、なかなか素晴らしい雰囲気の家です。息子さんは、将来、ストリートオルガンの製作者になりたいと、現在、ピアノの練習をし音感を養っています。

ヘンク・ヴェーニンゲンが造るストリートオルガンの特長は、決して渋くはないのですが、心落ち着く優れた音色です。ここに彼の楽器の人気があるようです。



▶ヴェーニンゲンの家族
(右端は音楽ホール職員)



▶楽譜作成中のヴェーニンゲン



サーター(DE SATER)

1898年製

重量778kg、パネルの幅6m、高さ2m80cmで現在日本にある手回しストリートオルガンでは最大級のもです。キー（オルガンの鍵盤に相当する部分）は全部で66あり、うち、高域メロディー部18、中域メロディー部17、伴奏域10、低域部8、打楽器部4、レジスター部9。ヴァイオリン、パンジョー、カリヨン、チェレスター、チェロ、フルート、ベース等の音色を奏すパイプは294本。打楽器は、ドラム、スネアードラム、シンバル、人形についた鐘が2個ついています。

「サーター」は、1898年室内で使う手回しオルガンとしてヨセフ・ブルセンス（Joseph Bursens）により造られたオランダで最も古い手回しオルガンの一つです。製作当初は、ベルギーのダンスホールに置かれ使用されていました。30年後の1920年「デ・フローテ・ブルセンス」（De Grote Bursens）という名で、オランダのテルニューゼンの町に戻り、3年後の1923年、製作者ブルセンスにより解体修理がされ、この時、移動が出来るストリートオルガンになりました。そして、デン・ハーグ市の有名なオルガン貸出業テオ・デニーズの手に渡り、テオ・ド・ルーアが1930年まで借り受け、ロッテルダム市を中心に演奏していました。その後、ピート・フェテリス、ドルフ・ファン・ド・アッカー、ヤン・ヒレットが使用します。

1954年の秋から1958年まで、ミテルブルグ市のブラウメンが所有者となりました。この時に、オルガンのパネルに描かれている人形の顔から、「サーター」と名前が改められました。1958年には、ミテルブルグ市が「サーター」を保存のために委員会を作り、ミテルブルグ市で1971年まで使用されました。1972年ハウヴェロース（Gouveloos）が購入、彼は「サーター」の大改修を行い、送風機の交換、

演奏機構の整備、さらに、パネルの絵も画家フェイテ・ポスマス（Feite Pothumus）により、現在のように描き直されました。完全に修復された「サーター」は、1973年5月、再びミテルブルグ市の街頭に現われました。

1987年1月アルクマール市のルード・ブリーネン（Ruud Brienens）が、オランダでの最後の所有者となり、チーズの町アルクマール、花の町ハーレムで演奏していました。歴史的に価値のあるストリートオルガンとして、テレビ、ラジオにもしばしば登場しています。

ルード・ブリーネンは、オランダの多くの人々に愛された「サーター」を恒久的に保存・活用することが重要なことと考え、オランダ国立自動楽器博物館に相談しました。博物館には、同年代のストリートオルガンがあったため、友好を深めている佐倉市に「サーター」の購入の奨めがあり、格別の配慮により、日蘭修好380周年記念の年、1989年10月佐倉市民音楽ホールロビーに届きました。製作された1898年の時と同様室内の手回しオルガンとして演奏に使用しています。大型ですので迫力がありますが、決して騒々しくなく、哀愁を帯びた音色は1世紀前の世界に誘ってくれます。

【購入協力】

常磐植物化学研究所



▲オランダで最後の所有者ブリーネン夫妻

佐倉市のストリートオルガン

千葉県佐倉市は、幕末の頃、老中首座となり日本の開国を進めた佐倉藩主 堀田正睦の奨励によりオランダ学問を中心とした西欧学問の振興地でした。この時代の佐倉藩関係の人々は明治には、近代日本の文化・芸術・経済面での先導者となりました。例えば、近代絵画の先駆者 浅井忠、津田塾大学の創立者 津田梅子、洋式製靴工場を作った西村勝三、今日も佐倉に保存されているオランダ医学塾「佐倉順天堂」は佐藤泰然が創設しました。1862年、幕府は初めて留学生を派遣しますが、派遣先はオランダであり、3名の佐倉藩の関係者が加わっておりまして。

時は流れて1世紀半。佐倉市は21世紀に向け、活力ある文化都市づくりをめざして、世界的視野から日本文化を考え直そうと、縁あったオランダとの交流を始めました。オランダはかつて世界の文化をリードしていた国でしたが、現在も、ヨーロッパ経済統合の提唱国として確たる信念に基づき、世界の国々と協調し、国の存立を考えています。経済成長著しい日本が、この繁栄を永続し、国際国家として各国から認められるには、オランダの歴史・文化や今日の姿勢を参考にすることが最も良いと言われています。

佐倉市は、1987年の春、佐倉日蘭協会を設立し、多くのオランダ理解の事業を行っています。1987年の秋、佐倉市民音楽ホールはヨーロッパで最大のオランダ国立自動楽器博物館所蔵のオルゴールやストリートオルガンを始めとする各種の自動楽器展を行いました。この展示会は解説と演奏つきで大好評でした。「1台でもよいから佐倉で身近に見聞きできないか」という多くの人々の要望にこたえて、最

も人気の高かったストリートオルガンを購入することにしました。

オランダ大使館の協力により異例の早さで、1988年の6月、特別注文の中型ストリートオルガン「さくら」が届きました。1989年7月には、日蘭修好380周年を記念して、地元の銀行から小型ストリートオルガン「ヴェーニンゲン」が寄贈。続いて10月オランダ国立自動楽器博物館ハスペルス館長の紹介により100年前に製造されたオランダでも貴重な大型ストリートオルガン「サーター」を購入しました。こうして、地方公共団体としては全国で初めて3台のオランダ製手回しストリートオルガンが佐倉市に揃うことになりました。

1990年から年に10回程度のストリートオルガン演奏会を開催、ロビーはいつも人で溢れています。

「さくら」や「ヴェーニンゲン」は、市内外の各種イベントに貸し出し、使用され話題・評判を呼んでいます。

佐倉市民音楽ホール

SAKURA CONCERT HALL

〒285 千葉県佐倉市王子台1-16

☎043-461-6221